○錦織亮雄氏の「時代を語り建築を語る会」

錦織氏の略歴
・1937 年、広島県生まれ
・1966 年、都市建築研究所設立
・1996-2000 年、日本建築家協会中国支部長
現在、広島県建築士会会長、新広島設計代表

・主　催　　時代を語り建築を語る会実行委員会
・開催日　　２０１２年１２月１日（土）
・会　場　　広島ＹＭＣＡ国際文化センター本館
・参加者　　４０人

被爆後、戦後の広島の復興を担った建築家の第一世代を引き継ぎ、展開した第二世代の代表的存在である錦織氏から、第一世代との関わり、第２世代としての取組、次世代への提言等を語ってもらい、広島の建築の歴史を検証することを主旨とする。

＜話の概要＞

錦織氏が半生を振り返りながら、自らの建築遍歴を語る。以

・被爆体験を原点として、戦後復興期の広島の風景は、野っ原に寝そべって夢を語り、道路は子供の遊び場で活気があり、平和祈念式典も真に迫るものがあった。基町の応急住宅や河岸の違法建築の中にもバーのような賑わいの場があった。
・昭和３６年に河内設計に入社した頃は、満州からの帰国者と共に設計していた。多忙な中でも、朝はコーヒーを飲みながら建築談議に花を咲かせ、技術の研鑽に励んでいた。東京分室時代には黒川紀章、浅田孝、大高正人等の若手建築家と集い、刺激を受けた。
・当時は市内に６社程度の設計事務所しかなく、お互いの内情を熟知していた。その頃は役所の人が設計事務所の手伝いをして、大らかな時代である。
・暁設計の広島農協ビルや市民病院は日本でも先端を行っていた。河内氏の猿猴川再開発計画や広島湾淡水化計画を紹介。
・昭和３９年に河内設計を退社し、日本地域開発機構の立上げに参画したが、昭和４１年に河内事務所千田分室を経て、自分の事務所を開設する。処女作「森元邸」、「せとうち苑」、イランやクエートの海外の団地計画等を紹介。
・広島まで新幹線が延びると東京の事務所が進出し、対抗するため昭和４５年に広島県設計連合が設立される。第１世代は専業主体の広島県建築士事務所協会を主張したが、昭和５５年ごろ専業・兼業別なく入会できる組織になり、設計専業６０社からゼネコン設計部等の兼業を含む３００社に増える。
・**河内氏からの継承は？**河内氏は中村順平（エコール・デ・ボザール派）に師事し、西洋的な建築家を志向したのに対して、多様な職能と協働し、統括する立場をとる。
・**次世代へのメッセージは？**昔は曖昧な責任の良さがあったが、今は責任の追及が厳しく、チェックやマニュアルの時代になった。役所とも発注者と受注者の関係で閉塞感がある。
もう少し昔の良さを見直しては？
・**都市と建築のあるべき関係は？**美しい街は個々の建築を誠実に作った結果、生まれる。

＊コメント＊

戦後の社会の世相や建築界の雰囲気を窺い知ることができ、大変興味深かった。

錦織氏は河内氏の薫陶を受けた結果、反面教師として別の建築家像を求めている。私は河内氏とまったく面識がないが、河内氏は自分を大衆文学、丹下氏を純文学と称したという。広島の改造計画案を世に問うたが、これも丹下氏の「東京計画１９６０」や菊竹氏の「海上都市」に呼応する。同年生まれの丹下氏にライバル心を燃やしたが、「広島の丹下」になれなかったのは建築のメディアを持たなかったからか？

今回、河内氏の改造計画案の話を聞き、感化されるものがある。建築家はまちづくりに積極的に関与すべきであり、市民に夢と希望を与えるような提案をして、市民とともに議論をすべきではないか。(自戒を込めて)　　(瀧口信二)

○時代を語り建築を語る会（第４回）：山木靖雄氏

時代を語り建築を語る会実行委員会（代表者石丸紀興）により、広島における都市計画系コンサルのパイオニアとして１９７３年に LAT 環境設計事務所を開設した山木氏を招いて、その足跡を語る会が催された。

・開催日　　２０１４年3月１５日（土）１７時１５分～
・会　場　　広島市まちづくり市民交流プラザ

略歴：1943 年広島生まれ、1966 年千葉大卒、1969 年広島県商工部観光課、1973 年ＬＡＴ開設、1987 年県議会議員、現在に至る

＜話の概要＞

山木氏は現在、広島県議会議員として活躍中だが、今回は議員に転身するまでの話が中心で、以下、要点を記す。

・代々続く家業の造園屋を継ぐために造園学科を有する千葉大に進学。日本庭園を志望したが、庭園学の先生が不在のため卒論は自然公園・都市公園にテーマを変更。その過程で建築学の必要性を痛感し、大学卒業後、広大建築学科の研究生となる。そこで２級建築士の資格を取得し、自分の造園設計理論を確立する。
・ランドスケープ・アーキテクチャアの事務所に興味を抱いたのは、昭和３９年の東京オリンピックで、都市公園の中に建つ多くのスポーツ施設を見た時だ。造園と建築を融合したコンサルとして、昭和４８年に LAT 環境設計事務所を設立。初期の頃、安芸地区の憩いの森基本計画や三原の運動公園計画等を行い、植物を扱う自然公園的な仕事を得意分野とする。

呉市蔵本通り

・代表作品となる呉市蔵本通り造園設計では昭和６２年度の日本造園学会賞を受賞。全国で初めての都市景観形成モデル事業として、河川、公園、街路を一体的に整備し、都市のシンボル性とオアシス空間を創出したことが高く評価された。

現在は、呉みなと祭が蔵本通り一帯で行われ、呉市の「顔」として象徴的な景観となっている。また、市民の声を活かして整備した「赤ちょうちん通り」の屋台も好評である。

・都市計画系コンサルが誕生するのは昭和４０年代半ば頃から。それまでは行政からのニーズに大学等の公的な機関が応えてきたが、大学紛争等の動きでストップする。代わりに民間プランナーが育ち、山木氏は広島における走りといえる。今は新しいまちづくりや再開発等の動きも下火となり、都市計画系コンサルの仕事も落ち込んでいる。発注者は行政が主体だから、行政・大学とも連携して新しい考え方を創出していく必要がある。

＊コメント＊

今回の話で、山木氏がコンサルを目指した経緯はよくわかったが、県会議員に転身する理由は触れられなかった。どちらも広島のまちを良くしたいとの思いであろう。コンサルの役割も時代と共に変化するが、未来のまちづくりに対して持てるノウハウを存分に発揮してもらいたいし、市民もコンサルを十分に活用してもらいたい。　　（編集委員　瀧口信二）

○「時代を語り建築を語る会（第６回)」報告　　語り人：高橋　衛氏
～広島に博物館は必要ないのか？　博物館構想を検証する～

略歴：1929 年生まれ、広島大学経済学部教授、福山大学教授など歴任。広島大学名誉教授、大和ミュージアム運営協議会会長

広島市

高橋　衛氏は昭和５０年代、・荒木市長時代の文策において、とりわけ博物館構想策定の中心的な役れた。当時、構想された背景・全体像・課題などエピソードも交えて語られた報告です。

主　催：時代を語り建築を語る実行委員会（代表：石丸紀興）
日　時：2014 年 9 月 26 日　場所：まちづくり市民交流プラザ

構想の背景

・当時、文化政策の論議の中で「比治山を芸術の森として東京・上野の森のように考えたい」との強い想いがあった。
・比治山芸術公園が、政令指定都市発足（1980 年）の記念事業として計画され、博物館はその中心的施設として位置づけられた。

☆　**構想の主な論議**

・点在する博物館（広島城・美術館・こども文化科学館など）を群として有機的に連続させる新たな「博物館群構想」により、広島市博物館（仮称）は博物館群のセンター機能を有する施設とする。
・近代～現代のテーマを中心とした博物館とすることを基本に、広島の特色を打ち出した目玉展示が重要課題であった。
①教育（高等師範学校が置かれた教育県）②スポーツ（日本人初の金メダリスト織田幹雄、似島のドイツ人捕虜が普及させたサッカー）③海外移民（ハワイ・ブラジルなどへ全国一の移民県）④産業（自動車、江戸時代からの針製造）⑤戦前の盛り場と娯楽、戦後の復興過程などが提案され論議された。
・博物館の計画にあたって時世・風潮に不偏であり、イデオロギーを絶対に持ち込まない。

☆　**博物館の必要性など**

・原爆投下前の広島は軍都でもあり、豊かな文化的都市でもあった。私達はその広島の歴史と文化を後世に伝える使命がある。
・博物館は都市の文化レベルを象徴する。その数は先進国の都市と比較して極めて少ない。
・放影研（元 ABCC）移転問題の解決が、博物館構想実現のための第一歩でもある。

＜コメント＞

文化とは「心のゆとり」であって「実利的な目的から離れた創造的な営み」である。３０余年前に文化都市を目指して構想され、広島市民の文化の中心となる比治山芸術公園は未完である。その中核となる博物館構想は忘れ去られようとしている。もしも、この博物館構想が実現していれば、江戸東京博物館（1993 年開館）のような存在感が今の広島にあると確信する。

（編集委員　高東博視）

比治山芸術公園の模型

① 青空図書館　④ 博物館
② 彫刻の森　⑤ 現代美術館
③ 創造センター　⑥ 伝統工芸館
他に野外ステージ、平和の森など。
（注）創造センター予定地に現代美術館が立地している。博物館予定地には現在も放影研（元 ABCC）が立地し移転の目途なし。

「比治山芸術公園基本計画報告書」
広島市 1980 年（昭和 55 年）10 月

○「時代を語り建築を語る会（第７回)」報告　　語り人：身延典子氏

～明治の広島～広島はいかに変容したか～

札幌から東京経由で広島に定住し、広島で出会った頼山陽に新たな光を当てた作家・見延氏が、他都市から見た広島、時代の中で変容してきた広島、特に明治の広島を中心に語る。
主催：時代を語り建築を語る実行委員会（代表：石丸紀興）
日時：2014 年 11 月 28 日、場所：まちづくり市民交流プラザ

略歴：1955 年札幌市生まれ、1978 年早稲田大文学部卒、同年「もう頬づえをつかない」刊行、1981 年から広島在住、2008 年「頼山陽」で新田次郎文学賞他受賞
2014 年新刊「竈さらえ」

☆　江戸から明治へ、軍都としての広島

・頼山陽とその弟子周辺の資料を調べていくと、広島は軍都になっていったという結論に達する。幕末から明治維新にかけて、既に広島には鎮台（後に師団）が置かれ、戦の前線基地として位置づけられた。決定打は、明治２７年に日清戦争が始まり、広島に大本営が開設され、すべての兵や物資が宇品から輸送された。

・戦争は一時的に景気をよくする。広島も人が集まり、その恩恵に預かっている。軍都の話をすると煙たがられるが、事実としてとらえておく必要がある。

☆　比治山について

・比治山に頼山陽文徳殿があり、祀られているが、なぜ死後にもてはやされるようになったか疑問を感じていた。彼の著書「日本外史」が幕末・明治に脚光を浴びて、新政府は天皇制の思想教育に利用したのではないか。

・比治山は花見の名所だが、幕末から明治・大正・昭和の戦争で亡くなられた方が葬られた陸軍墓地がある。ほとんど忘れられた存在だが、もっと光を当てて、戦争の怖さ、平和の有難さを伝える場にできないか。きれいな平和公園よりも戦争そのものを見つめさせた方が子供に与えるインパクトは大きいと思う。

・比治山は広島の歴史を見ている場所である。現代美術館やまんが図書館があり、博物館を建設する構想もあったようだが、貝塚・陸軍墓地・放影研（旧ＡＢＣＣ）等があり、比治山そのものが博物館と言える。

☆　広島のまちについて

・歴史のないまちは面白みに欠ける。広島には歴史があるのだから、被爆以前の歴史も紐解き、広島城を中心に据えたまちづくりがあってもよいのではないか。

・郷土の歴史が子供に教えられていないので、教育が大事と思う。

☆　安芸と備後の関係

・安芸は外様の浅野藩、備後は譜代の阿部藩。幕末から維新にかけての長州征伐や戊辰戦争等を通じて味方になったり、敵になったり。結局、新政府になって両藩が合併して広島県となり、広島市に県庁が置かれる。薩長が負けていれば、福山県広島市となっていた。

☆　聴講者からの意見等

・森保洋之氏（広工大名誉教授）・・・江戸を踏まえて明治・大正にも元気な営みのまちがあったはず。例えば、料理屋等の５階建楼閣。その元気さを探し出し、紡いでいきたい。

・大田晋氏（元広島市助役）・・・市民の寄付により広大を誘致する元気さがあった。被爆を声高に叫んで国からの援助を期待する受け身体質から脱皮しなければ元気になれない。

・山田康氏（元広島市助役）・・・広島は上から軍都にさせられたのであり、市民の側に立って考えてみる必要がある。市民が軍都を望んだとは思わない。

＜コメント＞

歴史的な事実を検証しながら小説を紡いでいく文学者のクールな視点は新鮮であり、説得力がある。明治の日清戦争の頃まで執筆が進んでいるようだが、広島の大正・昭和の戦前までた

どり着いてもらえば、まちづくりを考える上での貴重な財産となろう。

（編集委員　瀧口信二）

第１６号(平成２７年３月１５日)

○「時代を語り建築を語る会（第８回)」報告　語り人：石丸紀興氏

～広島大規模土砂災害から～広島の各種計画を検証する～

略歴：1940 年岡山県生まれ、1966 年東大大学院卒、広大建築学科助手、1996 年同大教授、2003 年 広島国際大建築学科教授、2011 年広島諸事・地域再生研究所代表

今回は、長年広島の都市計画に関わってきた石丸紀興氏が昨年８月に発災した大規模土砂災害から見えてきた問題点等について反省的な報告を行い、参加者と共に改善点等を深めていった。

主催：時代を語り建築を語る実行委員会（代表：石丸紀興）

日時：2015 年２月 28 日、場所：まちづくり市民交流プラザ

☆　総合計画の必要性

・８月の土砂災害では、リアルタイムでテレビニュースを見ていたが、なかなか事態の全体像把握に至らないことに気づきイライラしていた。災害発生の全体像、その原因や担うべき各分野の責任の全体像を明確にしておかねば、今後 10 年、20 年と時間が経過したとき、この災害体験の教訓がうやむやになるのではないか。

・防災計画や都市整備などを総合的に考える「総合化」について本気で取り組むべきである。

☆　大広島計画が基点

・昭和初期に広島市が周辺町村と合併を進める基になった「大広島計画」には、人口増を単純に歓迎するというのでなく、「広島の保護が第一」として規模を大きくするだけでなく、安全を第一にすべきことが示されている。旧藩時代から山林保護には力が入れられてきたことを強調している。

・ところが一転して昭和中期（33 年）の「大広島計画」では、10 年間で 55000 戸建設、用地所用面積約 760ha を想定し、平地部よりも山地開発を優先する考え方を提示した。この段階では防災的な観点が十分に示されなかった。

☆　第３次総合計画に「防災」ほとんどなし

・荒木市長時代、平成元年策定の第３次総合計画では、山田市長時代の第１次やその後の第２次総合計画で示された規制的な政策が転換され、防災についてはほとんど触れられていない。西風新都やアストラムラインの計画をはじめ、規制緩和による開発を受け入れる姿勢を示している。

・昭和 42 年の呉地域災害が地形的、地質的にも広島に似ており、同じような気象条件になれば同じような被害が出ることは指摘しているが、具体的対策は示されていない。

☆　急速に進んだ市街化

・総合計画策定以前、私自身が携わった GYS 開発マスタープラン（昭和 43 年の祇園町・安古市町・佐東町地域開発基本計画）では、今回のような山の上からの土砂崩れ対策についての意識が弱かった。当時、急激に進んだ市街化を市街化調整区域で食い止めることは考えたが、防災的な観点での規制手法ではなかった。宅地開発について規制をもう少し厳しく考えるべきであった。

☆　住民参加の手法導入

・昭和 46、47 年に日本都市計画学会中国四国支部が広島市から委託された「広島市周辺部整備基本計画」で住民参加の手法を取り入れた。

・平成 19、20 年度において日本都市計画学会同支部で取り組まれた市民ワークショップによる地区別まちづくり構想策定は、その手法自体は画期的で評価すべきであるが、テーブルマスターとしての専門家が、本来の専門家としての役割を発揮しておらず、防災的な視点が弱い計画策定となったことを反省しなければならない。ワークショップ手法を基本的に改善すべきである。

＜コメント＞

住民の合意や専門家の意見が行政に反映されなければならないが、実際には「審議会」のような形で、行政当局の意向に沿ったものになっているのが実態だろう。住民の声を大切にしてこられた石丸氏の取り組みや姿勢、広島市の防災思想の変遷がよくわかった。

（ジャーナリスト　吉田光宏）

第１９号(平成２７年９月１５日)

○「時代を語り建築を語る会（第９回）」報告　語り人：能登原由美氏
～広島の音楽の場を語る～明治・大正・昭和を通して～

「ヒロシマと音楽」委員会の委員長であり、広島市被爆 70 年史の編修にも携わっている能登原氏に音楽の視点から広島の歴史について語ってもらった。

主催：時代を語り建築を語る実行委員会（代表：石丸紀興）
日時：2015 年 7 月 17 日（金）18:00～20:00
場所：合人社ウェンディひと・まちプラザ

略歴：広島大学大学院博士課程修了（学術博士）、「ヒロシマ」に関わる音楽の研究と普及活動のほか、「広島の音楽史」編纂プロジェクト主宰

☆　「ヒロシマと音楽」委員会とは

・被爆５０周年の 1995 年に「ヒロシマと音楽」実行委員会を組織し、「ヒロシマ」や「原爆」、「反核」などをテーマとした音楽を掘り起こし、未来に継承するためのデータベース化を行う。2002 年に実行委員会の有志による「同」委員会を結成し、同事業を継承している。

・2006 年にこれまでの成果を「ヒロシマと音楽」のタイトルで出版。2010 年より毎年「ヒロシマ・音の記憶」コンサートを行い、普遍性のある優れた音楽作品を紹介している。

・自分が発掘したフィンランドの作曲家エルッキ・アールトネン（1910～90）は 1949 年に原爆投下をテーマにした交響曲第２番「HIROSHIMA」を作曲し、その年にヘルシンキで初演。1955 年には開館したばかりの広島市公会堂で演奏され、好評を得た。今年は被爆７０年を記念してこの曲を再演するコンサートを年末に企画している。

☆　広島における洋楽の歴史（明治から戦前まで）

・戦前の広島は軍都、学都と言われているが、明治期には軍楽隊や学校教育から洋楽が入ってきた。その他に教会やミッション系の学校の宣教師からの流れもある。さらに昭和に入ると放送局ができて、ラジオから広まり、レコード等により大衆化が進む。

・軍楽隊は学校の生徒と一緒に演奏会に参加したり、放送局の番組に出たり、積極的に外に出かけて演奏し、市民にも受け入れられていた。

・高等師範学校・師範学校等の講堂では定例音学会が開かれ、音楽の先生や生徒達が発表したり、外部から音楽家を招いたりしている。

☆　戦時下の状況

・国家総動員体制になり、どうすれば音楽で国の役に立てるかが問われる。戦意高揚のための音楽や音感を活用した仕事等。戦況が厳しくなると、洋楽等は敵国音楽として抑制されていく。

☆　戦後の復興期

・純音楽茶房ムシカは 1946 年にオープンした音楽喫茶。音楽鑑賞の場として、歌声喫茶として、戦後の広島を音楽によって支え続けてきた。広島流川教会も 1946 年から慈善音楽会や市民クリスマスを開催し、市民を音楽の力で勇気づける。

・1946 年、広島の学生たちの合同合唱団「学生音楽連盟」が結成され、日本を代表する音楽家を招いてコンサートを開催。目的は、学校の復興資金を集めたり、広島を音楽で元気にすることだったが、1950 年の学制改革により活動の幕を閉じた。

・1947 年、広島市主催により平和とヒロシマをテーマにした歌が公募され、選ばれた「ひろしま平和の歌」は同年の第１回平和祭（平和記念式典）から今も歌い継がれている。

・占領下には原爆を非難するような歌は控えられていたが、1952 年の独立回復以降は「原爆許すまじ」のような反戦歌も生まれてくる。

＜会場より＞

・一人の人間が時代の流れの中でどう歌に対していたかという視点も必要。戦時中は一概に抑圧されていたとは言えない。子供たちは軍歌も替え歌にして喜々としていた。戦後、ムシカと対抗するように反体制的なシャンソン喫茶が流行っていた。

＜コメント＞

戦後の復興に音楽がいかに心の支えとなったかがよくわかった。　（編集委員　瀧口信二）